

ピンポン顧問

加藤良作

大学を卒業して府立十中に数学の教師として就任したのは昭和二十三年の四月です。

授業のほかにクラブの顧問もするように言われたのは何時ごろだったか。

とも角何一つとして得意なものない私にとってどんなクラブの顧問だってつとまる筈はない、そうは思いながらも小学校から中学の二年生の頃まで近所の友達と遊んでいた草野球とピンポンならと思ひ、汗を流さないですむピンポンを選ぶことにしました。

こんな不真面目な気持でなつたのが卓球部の顧問だったのです。

今はなくなった体育館で、教室の机を並べて下敷をつかつて、或いは今なら大ゴミで道路にすてられそうな卓球台をリヤカーで運んできての練習、その道具だては、正に私の考えていたピンポンそのものだったので、毎日の練習を見ているうちに、それは全く異質のスポーツであったのです。

インターハイ或いはインターカレッジは共に戦中戦後で一切中止、全日本で優勝とか、まして世界選手権など、古い寮歌の中にその感激、その喜びを想像するだけでした。

それが荻村君の全日本優勝にびっくりしながら言い表わし様もない興奮にひたつたのもつかの間、彼は世界選手権までもその手中にしたのでした。それは、荻村君自身の偉業だったのですが、決して他人のことではなく西高自身の興奮だったのです。

そして、体育館のコートに世界のトップレベルの卓球が連日繰りひろげられていた。

思えば終戦後の混乱ですっかり自信を失って居た私達は、「日本一」も「世界一」も、何でもない一人一人の人の努力の結果として達成できるのだという実感を体験させて貰ったのです。

西高卓球部について考えるとき、自分のしたことは何もなく、思い出すものは田中・荻村両君をはじめ歴代の部員諸君に教えられ、与えられることばかりだった様です。

良い先輩、良い伝統は容易には得難く、求めても一朝一夕に創り得るものではありません。

西高卓球部の先輩、後輩相たすけて、良き伝統を守りそして育てて行ってくれることを心から祈って止みません。